

第16回作業科学セミナー 特別講演

ヘルス・エスノグラフィ—子どものフォトボイスを事例として

道信良子

札幌医科大学医療人育成センター

要旨：エスノグラフィはこれまで保健・医療・福祉の領域にさまざまに応用されてきた。その歴史をふまえ、これからの保健・医療・福祉の領域において展開されることを期待する新しいエスノグラフィのあり方について論じる。その際に、「ヘルス・エスノグラフィ」という概念を用い、文化を軸として展開されてきたこれまでのエスノグラフィとは異なる、「医療を軸とするエスノグラフィ」の視点や目的について、子どものフォトボイスを事例に論じる。

作業科学研究, 6, 15-19, 2012.

キーワード：ヘルス・エスノグラフィ, 作業療法, 子ども, フォトボイス

The 16th Occupational Science Seminar, Special lecture

Health ethnography: A case study of children using photovoice

Ryoko MICHINOBU

Sapporo Medical University

Medical, health, and social welfare professionals and scientists use ethnography in their disciplines in various ways. Based on this, I will discuss a new type of ethnography by introducing the concept of “health ethnography.” The main targets of inquiry in health ethnography are medicine and medical care, not cultural. I will explore how such an inquiry is possible from a case study of children using photovoice.

Japanese Journal of Occupational Science, 6, 15-19, 2012

Key words: Health ethnography, Occupational therapy, Children, Photovoice

はじめに

人類学で行われる調査にはエスノグラフィ (ethnography) という方法論を用いる。エスノグラフィは人類学以外にも用いられ、保健・医療・福祉の研究においてもさまざまに応用されてきた。本稿では、これまで保健・医療・福祉の領域に応用されてきたエスノグラフィをふまえながらも、新たにこの領域で展開されることを期待するエスノグラフィのあり方について論じる。その際に、「ヘルス・エスノグラフィ」という概念を用いて、文化を軸として発展してきたこれまでのエスノグラフィにかわる「医療を軸とするエスノグラフィ」について論じ

る。また、作業療法と作業科学への示唆について述べる。

ヘルス・エスノグラフィ

1. エスノグラフィの起源

エスノグラフィの起源は、イギリスの人類学者ブロンニスワフ・マリノフスキー Malinowski, Bronislaw K. (1884～1942) がニューギニア島の東にあるトロブリアンド諸島で行った長期の調査にさかのぼる。マリノフスキーは現地の人びとと生活を共にし、現地のことばを学び、そこで繰り広げられている暮らしのありようを詳細に記述した (Malinowski 1922)。人類学では、人びとの生活のあ

りようやそれを成り立たせているものを「文化」と呼び、人のこころ、人と人とのつながり、人がつくるモノという大きく3つの領域にわけて理解する。

エスノグラフィの目的は、歴史的にみると、世界の民族の暮らしを比較することによって、①世界の文化がどのように同じまたは異なるのかを理解し、②異文化を理解することによって自文化をふり返ることである。そうして、自分が慣れ親しんでいる暮らしのありようも人間のさまざまな文化の多様性のひとつであることを知る。このため、人類学の調査は、民族やある特定の文化的なまとまりをもつ集団を対象としてきた。

近年では、民族内部の異なりに、徐々に関心が移っている。それは、地球規模で人が移動するようになり、また、情報網が発達したことにより、ひとつの民族からなるコミュニティも外からの影響をさまざまに受けるようになり、コミュニティ内部の多様性が生まれているからである。そのため、比較的小規模の民族を研究の対象として、その民族に共有されている文化を記述してきた人類学者は、民族内部の多様性や現代社会の問題へと関心を移すようになった。

日本や欧米諸国では、自文化も含め、現代社会に特有の領域に的を絞って行う「焦点化されたエスノグラフィ *focused ethnography*」が行われるようになってきている。それは、これらの国々では、高度な専門性を備えた「専門家集団」が生まれ、専門領域によって異なるさまざまな文化を生み出しているからである。こうした変化にともない、エスノグラフィの意味も微調整され、今では、「人びとが生活し実践する具体的な現場に調査者が直接入り込み、一定の期間かかわりを持ち、そこで見つけた事象をその文脈も含めて理解し、理論化するための調査研究のアプローチ」(小田 2011: 34) と広く定義されている。

2. 保健・医療・福祉の領域に応用される

エスノグラフィ

エスノグラフィが保健・医療・福祉の領域に応用されるとき、その研究が何よりも人びとの健康や福利の向上を目的としているため、エスノグラフィの用いられ方が人類学のそれとは異なってくる。具体的には、人びとの暮らしを理解することにとどまらず、暮らしの現場で起きているさまざまな問題を解決するための「アクション」を伴う。そのとき、人間のどのような考え方や行動も当該社会の文脈で理解し、価値判断をしないという人類学の基本的な立場は崩れ、研究者は、現場において何が問題とされどのような改善をすればよいかという判断を迫

られる。

本来、エスノグラフィは「文化を軸に」展開されるものであり、価値判断を行わないとする「文化相対主義」の立場から文化をとらえている。そのため、保健・医療・福祉の領域に応用するときには、人類学で共有されている相対主義的な現象理解の方法論 (*methodology*) から切り離されて、ひとつのメソッド (*method*) として取り入れられることになる。そうすることで、判断と実践が可能になる。このような用いられ方を批判的にとらえる見方もあるが、本稿では、保健・医療・福祉の状況に見合ったエスノグラフィのよりよい形を考える契機とみなす。そして、今後この領域において展開されることを期待するエスノグラフィについて「ヘルス・エスノグラフィ」という概念を用いて論じる。

3. ヘルス・エスノグラフィの視点と目的

エスノグラフィの視点や目的は、それが行われる領域によって変化する。保健・医療・福祉の領域で行われる場合には、①医療を軸とする、②いのちへ働きかける、③具体的なイノベーションをもたらすという3つの特色をもつと考える。

ヘルス・エスノグラフィは、文化ではなく、医療を軸とした探求を行う。医療の対象は人間の身体であるが、それは生物としての実在を示すとともに、文化を担う。たとえば、気温や気圧などまわりの環境変化に対する身体的な反応や症状は、生物としての営みである。一方、人間の身体には男らしい、母親らしい、若々しいなどその文化の規範に応じた意味づけがなされる。精神やこころのありようも身体のありようと深くかかわっている。人間の身体や身体経験にはこのような多様な側面がある(道信 2011)。そのため、医療を軸とするということは、人間の身体についての深い洞察と、生物と文化の両方を視野に入れる包括的な視点が必要となる。

ここでの医療とは、臨床、在宅、公衆衛生を含むあらゆる場における人間の身体への働きかけである。より正確には、人のいのちへの働きかけである。それは、病院での治療やリハビリテーション、在宅での看護や介護、コミュニティでの保健活動や予防活動のすべてを含む。ヘルス・エスノグラフィでは、これらの場における働きかけのありようや、患者や生活者がいかにその働きかけを受けとめて自らの身体とかかわっていくかを探究する。それによって、より根源的な問いである「人間にとってのいのちとは何か」を明らかにする。

このような視点と目的から行われるエスノグラフィは、現在のヘルスケアに具体的なイノベーションをもたらす。

ヘルスケアの新たな発見は毎日の暮らしの中にある。「暮らす」身体の細かな観察を通じて、暮らしの中で育まれるいのちとは何かを明らかにし、それにいかに働きかけるかを考えることが、その時代においてもっとも革新的なヘルスケアにつながると考える。

利尻島における小学生の食と研究に関するフォトボイス

ヘルス・エスノグラフィの方法論を一部用いて行った事例を紹介する。これは、北海道の利尻島で生活する子どもの健康と食生活に関する共同研究であり、2009年の4月から2010年3月まで行われた。¹ 研究には文化人類学、生物学・栄養学、病理学をそれぞれ専門とする研究者3名が参加し、子どもたちの身体観や健康観の特徴とその食生活とのかかわりを明らかにし、島の子どもの健康について考える基礎資料を作成した。

1. 研究方法

「フォトボイス」という研究手法を用いた。子どもたちは、毎日の食生活や身体の発達・健康について自分たちの視点から考えた。具体的には、学校や家庭における遊び、運動、食事の場面を写真におさめ、絵で表現し、それらを見ながらグループで話し合い、結論を導いた。自分たちの日常生活を写真や絵という資料にもとづいて探究するこの試みは、フォトボイスを応用した子どもたちによる日常生活のエスノグラフィとすることができる。

フォトボイスはアクションリサーチの研究手法として発達した。地域で暮らす人びとがその地域の生活を一番よく知っているという前提にもとづいている。そして、研究実施者（以下研究者）ではなく研究参加者が、日常生活の場面を写真におさめ、その写真をもとに議論することを通じて、住環境、教育、医療などにかかわるさまざまな課題を発見し、それに向けた解決策を導くことや政策提言を行う。本研究では、課題の発見や政策の提言までは目的に含めず、子どもたちが日常生活を深く観察し振り返る活動として、フォトボイスを行った。研究実施者は手順を説明し、それ以外の介入は行わず、写真や絵を活用して子どもの考えていることを子どもの視点から引き出すことに努めた。フォトボイスの対象者は、利尻富士町鬼脇の児童27名である。

フォトボイスは次の手順で行われた。まず、2010年2月15日と16日に2日間のワークショップを開催し、1日目に、研究者は、①活動の目的を児童に説明し、②カメラとプリンターの使い方を指導し、③朝食の場面を振り返るよう話した。児童は、画用紙に色鉛筆や絵の具で朝食の絵を描いた。2日目に、児童は、①体育館で遊び、

給食を準備している様子を写真に撮り、②撮った写真を印刷し、③印刷された写真と前日に描いた絵を見ながら、食と健康との関係について話し合った。話し合いには研究者3名と小学校の教諭もファシリテーターとして参加した。児童は、ワークショップの後も2週間程度、学校生活の写真を撮り続けた。そして、2010年3月24日の報告会を兼ねた2回目のワークショップにおいて児童と研究者はそれぞれの気づきや学びについて意見交換した。

2. 活動の結果

本活動の結果を子どもの健康観(子どもは自分の健康についてどのように考えているのか)と子どもの世界観(子どもは自分のまわりの世界をどのようにとらえているのか)の2点に絞り、以下にまとめる。なお、健康観や世界観は、本人にとってあまりにもあたり前のことであるから、それを説明することは通常できない。そのため、人類学者は聞き取りや観察を通じて対象となる人がもつ健康観や世界観を引き出してきた。本研究では、写真と絵から子どもたちの実際の視点を引き出した。そして、子どもたちは大人からの助言を得ながらグループで討議することによってその視点を自分たちでまとめていった。そのため、フォトボイスは子どもたちにとっても自分自身の視点や考え方に気づく活動であった。

子どもの健康観

子どもたちは食と健康の関係について次のように説明した。「朝ごはんを食べると、それがエネルギーとなり、元気に遊び、勉強することができる。よって、元気に遊び、勉強するには、朝ごはんを食べなければならない。」(グループ発表からの抜粋)食がからだの働きにかかわっていることについて、子どもたちはよく理解できていた。また、写真や絵から考えることで、食とからだのつながりを確かにイメージすることができたようであった。ただし、身体の生理学的現象としての「つながり」の具体についてイメージできなかった。そのため報告会において、体内に取り込まれた食物は、いくつもの変化をとげて、からだの一部となり、からだを維持させていること、そして、からだを構成する要素はつねに変化していることについて説明したが、子どもたちははっきりと理解していないようだった。

子どもの世界観

世界観は文化人類学の概念であり、通常、人間がまわりの世界全体についてもつ統一的な解釈のことを指し、民族や文化的集団を単位に考察される。ここでは、子

もがモノや人をふくめてまわりの世界をどのように見ているかという「視点」という意味合いが強い。フォトボイスで写した写真を見ると、まわりの世界を見る視点が、子どもの成長に伴い次のように変化していることが明らかになった。

まず、1年生から6年生へと成長する過程において、食やからだを「個」でとらえたものから、複数のものがかかりあう「システム」でとらえたものへと、視点の変化が見られた。たとえば、ハンバーグひとつを画用紙の真ん中に大きくとらえることから、食卓やまわりの家具までふくめて食事の全体をとらえることへと、朝食の描き方が変化していた。遊びの様子については、ひとりの顔を大きくとらえた写真から、体育館全体や複数の人をとらえた写真へと、対象のとらえ方に変化があった。

次に、1年生から6年生へと成長する過程において、食やからだの「静」の部分をとらえたものから、「動」の部分をとらえたものへと、視点の変化が見られた。たとえば、配膳の基本にならい、ごはん、汁物、おかずがきちんと並べられている様子をとらえることから、はしでラーメンをもちあげている様子や、ごはんやラーメンから湯気が出ている様子をとらえることへと、対象のとらえ方や描き方に変化があった。遊びの様子については、高学年になるにつれて、バスケットボールを投げる人の手の細かな動きや、ボールそのものの動きを瞬間的にとらえた写真がふえた。

この2点から、動きやシステムへの関心が成長とともに高まっていることがわかる。低学年から高学年になるにつれて、動きへの関心が高まり、また、動きを表現する力がついている。また、個体ひとつひとつへの関心から、全体のつながりへの関心が高まり、そのつながりを表現する力がついている。ただし、食の場合は、決められた作法における「許された動き」を表現している。食事の作法は、人間の文化のなかでももっとも厳しいきまりごとから成り立っている。児童の描いた絵は、その作法に倣いつつ、食の動きをとらえたものとなっている。その一方で、遊びや運動には機敏な動きや創造性が期待されることから、子どもはのびのびと自分を表現することができる。

3. 作業療法と作業科学への示唆

子どもの成長過程にあわせた食事の作業療法

作業療法にこれらの結果がもつ意味についてまとめる。ひとつは、食事の作業療法に子どもの成長過程にあわせた「視点の変化」を取り入れることで子どもは楽しく作業に取り組むことができると考える。たとえば、食事と

いう作業の支援に、子どもの成長や回復の程度にあわせて、配ぜんや家族、友人とのコミュニケーションなど食の営み全体に配慮する活動を取り入れる。その際に、低学年にはひとつひとつの食物についての説明、中・高学年には食の営み全てに対する関心を促すような説明が、子どもには理解しやすく、適切である。また、障害のある子どもが学校に通い、普通学級に入っている場合には、そのような子どもを包摂する場を構築するために、担任や児童を含めたクラス全体が介入の対象になる。つまり、給食の時間においてクラス全体が備えている作業は何かを考える。こうしたクラス内の相互関係や力学は作業科学のテーマとしても興味深い。

子どもの成長過程にあわせた遊びの作業療法

もうひとつは、遊びという子どもにとって不可欠な作業の支援である。これは治療の手段として用いる遊びではなく、「遊び」そのものへの介入である。現代の子どもには、人間関係の作り方や社会との関わり方がわからないために孤立し、それによる引きこもり、薬物依存、自傷・他傷、自殺・他殺をはじめとするさまざまな問題があることが指摘されている。本研究で明らかになったように、子どもは本来「つながる力」をもっている。動きやシステムへの関心が成長とともに高まるということは、子どもは自然界や人間の世界のさまざまなモノや人となつなごる力を備えていることを予測させる。まわりの世界とつながる力は生涯にわたって健康に生きる力となる。それにもかかわらず、子どもたちは「閉じた身体」をもつようになっている。

作業療法はこのような子どもが抱える問題に対して、遊びという作業の支援を通じて子どもが他者とかわる力を伸ばすことができるのではないだろうか。子ども同士の遊びのリハビリテーションなどを用いて、障害を持つ子どもに限らず、子ども全体を対象を上げ、その可能性を展開できると考える。また、子どもの発達にどのような作業的な発達過程が含まれているのかは作業科学の観点からも興味深いテーマである。

まとめ

社会のシステムの安定性がゆらぎ、人の生き方も変化している。どのような医療行為にも人はどう生きるのかという問いがその根底にある。その生き方のありようはもはや予測がつくものではないから、日々の現場に立ち戻り、日常を生きる人びとの生き方から学ぶしかない。ヘルス・エスノグラフィはそのひとつの方法論になる。

ヘルス・エスノグラフィは、医療を軸とし、人のいの

ちへ働きかけ、具体的なイノベーションを現場にもたらし、子どものフォトボイスが示したように、子ども自身がエスノグラファーになり自分の健康について考えることで、対象の観察や記述に終わらない研究となった。それは、子どものいのちに働きかける行為でもある。子どもたちは写真や絵を使って自由に楽しみながら食と健康について考えた。子どもを主役に子どもが使える手段を用いて探究するという方法は、これまでのおとなの見方を相対化するものであり、これからの学校現場における食や健康教育のあり方、障害をもつ子どもたちを包摂する学校教育のあり方に示唆を与える。

文献

小田博志 (2011). 文化人類学と質的研究. (波平恵美子編), 文化人類学, 医学書院, pp. 25-49.

Malinowski, B. (1922). *Argonauts of the Western Pacific*. London, Routledge and Kegan Paul. (寺田和夫・増田義郎訳) (1967). 西太平洋の遠洋航海者. (泉靖一編) マリノフスキー, レヴィ=ストロース, 世界の名著第59巻, 中央公論社.

道信良子 (2011). 健康・病気・医療. (波平恵美子編), 文化人類. 医学書院, pp. 157-189.

脚注

1. 平成21年度(2009年度)札幌医科大学特定医学研究推進事業(先端的研究)および平成21年度(2009年度)札幌医科大学教育研究高度化プロジェクト支援事業の助成による。札幌医科大学倫理委員会の承認を得て行われた。